6　きょう土を開く

(1)　鈴木　菊意　～地域の自然を保護し、すばらしさを伝える～

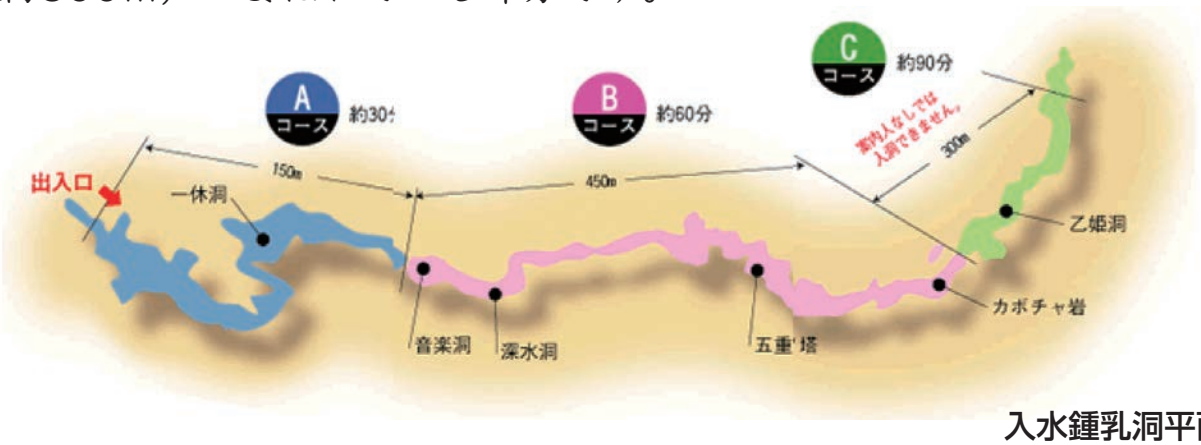
菊意のかご穴への思い

入水鍾乳洞を発見し，長年にわたりその管理を行った鈴木菊意は，明治32年（1899年），滝根村（現在の田村市滝根町）の農家の長男として生まれました。菊意は，青年時代に「かご穴（※１）」の言い伝えにたいへん興味を持ちました。子どものころから聞いていたその言い伝えは，「三山（※２）にはかご穴がある。」というものでした。そのかご穴をさがし出したいと思った菊意は，農作業の合間を見ては山に通いました。「かご穴さがし」は，何年にもおよびました。

鈴木　菊意

鍾乳洞の発見

昭和２年（1927年）６月に神俣駅で鍾乳洞についての講演会が行われました。この講演会をきっかけに菊意の「かご穴」への思いはますます強くなりました。「かご穴さがし」にむ中になり，農家の仕事を家族へまかせきりにするほどでした。その年の８月25日，菊意は，仲間とともについに「かご穴」の入り口を発見しました。このとき菊意は，滝のすさまじい流れとごう音にしばらくふるえがとまりませんでした。「かご穴」に興味を持ち始めてから約８年後のことでした。当時発見された場所が，第一洞（Ａ，Ｂコース：約600ｍ）とよばれている部分です。



入水鍾乳洞平面図
（田村市ホームページより）

※１　穴がたくさんあって水がもれてしまうという意味。鍾乳洞のこと。

※２　田村市滝根町の東側，南北につらなる駒ヶ鼻（856ｍ），中平（854ｍ），仙台平（871ｍ）の３つの山のこと。

洞内を調べる菊意

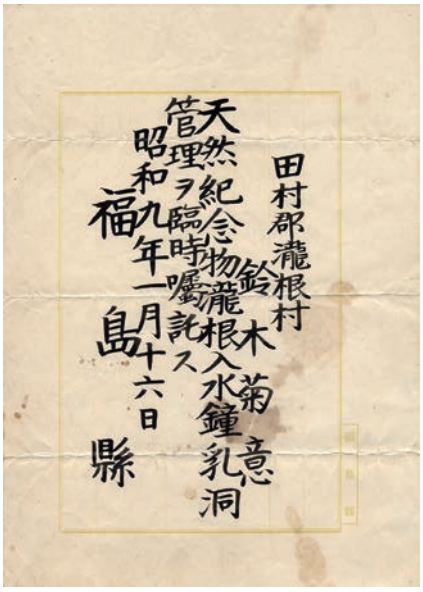
鍾乳洞を守りたい

「かご穴」の発見は，滝根村の大きな話題となりました。昭和３年（1928年）には，臨時村議会が開かれ，鍾乳洞の保存が決定しました。翌年には鍾乳洞の調査が進み，天然記念物指定の申請が出されました。ところがそのころ，三山の大理石を原料としたセメント工場を建てる話が持ち上がっていました。工場ができれば人々の生活が豊かになり，さらに村の発展にもつながるのです。ただ，大きな問題が一つありました。それは，鍾乳洞が天然記念物に指定されてしまうと，大理石をほることができず，工場をつくることができなくなってしまうのです。しかし，工場ができれば，鍾乳洞はこわされてしまいます。工場を建てることに賛成する人の考えと鍾乳洞を保護し，国の自然科学資料として残したいという菊意たちの考えは対立してしまいました。

天然記念物指定

菊意たちは，鍾乳洞のすばらしさを多くの人に知ってもらいたいと思いました。そのために，鍾乳洞の中に入りやすいように入り口を作り直しました。また，板やはしごをわたして歩きやすくしたり，進路の表示をつけたりしました。学者や支援者のはげましを支えに天然記念物指定の必要性をうったえ続けました。ところが，鍾乳洞で金もうけをたくらんでいると悪口を言われたり，変人あつかいされたりすることもありました。それから，鍾乳洞をこわそうとする人や貴重な鍾乳石を持ちさろうとする人もいました。そんな人たちから鍾乳洞を守るために，入り口で夜中見張りを続けたこともありました。ついに，その努力が実を結び，昭和９年（1934年）に天然記念物として指定されました。この知らせを受けたとき，菊意は思わずうれし泣きしました。

入水鍾乳洞・音楽洞

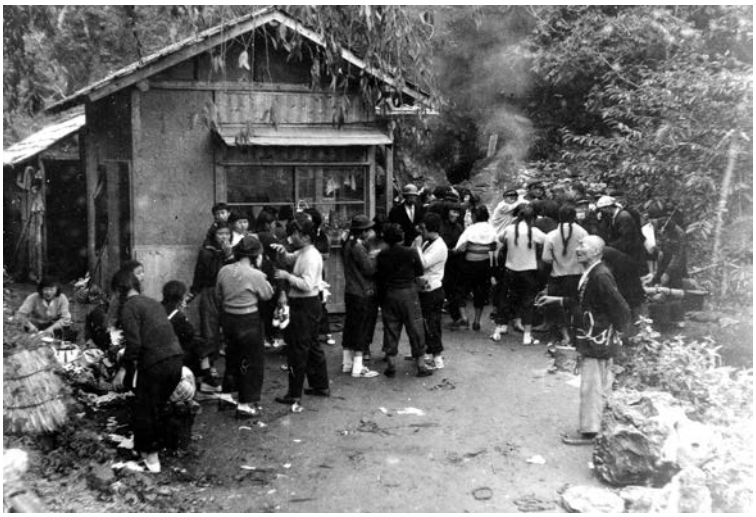


県の委嘱状

鍾乳洞に一生をささげた菊意

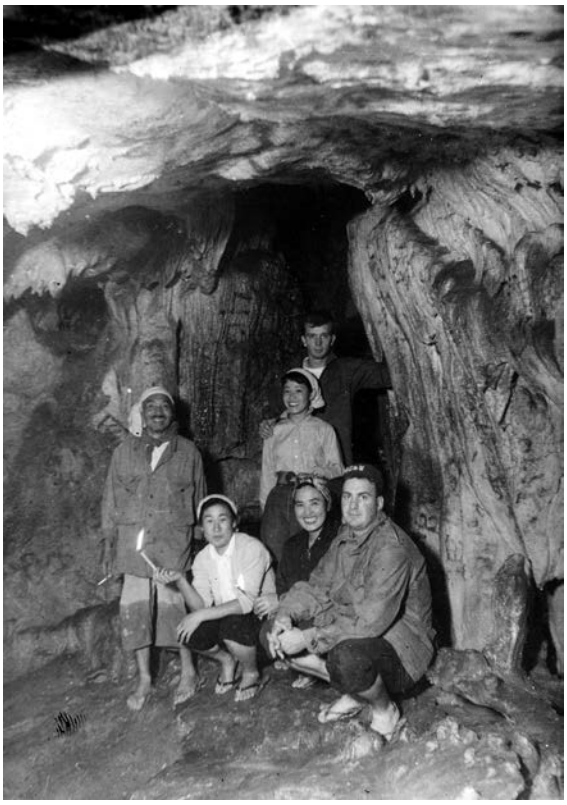
そのころ菊意は，臨時に福島県から鍾乳洞の管理を任されていました。その後，町職員となり，私財を投じて入り口に管理小屋を作りました。観光客の案内も進んで引き受けていました。また，入水鍾乳洞の維持管理に専念するために，鍾乳洞の近くに小さな家まで建てました。菊意は生活のすべてを鍾乳洞のためにささげ，鍾乳洞とともに生きたのです。

昭和35年(1960年)には，入水鍾乳洞の管理をすべて町が行うようになりました。そして，この年，鍾乳洞の発見とその管理に力をそそいだことがみとめられ，菊意は県の表彰を受けました。菊意の鍾乳洞にかけた熱い情熱は，多くの人々の共感をよび，その後の鍾乳洞の研究や自然保護の普及に大きな影響をあをたえました。



観光客を歓迎する菊意

現在の入水鍾乳洞



観光客と記念撮影

鈴木菊意・鍾乳洞関係年表

１８９９(明治32)年	菊意，誕生
１９１９(大正８)年頃	「かご穴」に関心を持ち，さがし始める
１９２５(大正14)年	菊意結婚
１９２７(昭和２)年	滝根不動洞(入水鍾乳洞)発見
１９２８(昭和３)年	臨時村議会で鍾乳洞の保存が決定
１９２９(昭和４)年	第二洞の探検・調査が進む 天然記念物指定の申請
１９３３(昭和８)年	滝根不動洞から入水鍾乳洞と改称 天然記念物の仮指定を受ける
１９３４(昭和９)年	菊意，入水鍾乳洞の管理を任される 入水鍾乳洞が国の天然記念物に指定される
１９６０(昭和35)年	町が入水鍾乳洞の管理を行う 菊意，県から表彰される
１９６９(昭和44)年	あぶくま洞発見
１９７３(昭和48)年	あぶくま洞一般公開開始
１９７９(昭和54)年	菊意，死去

(2) 宗像　利吉　～地いきの産業をさかんにしたたばこの神様～

1874～1958

明治７年（1874年）大越村（現大越町）の農家に生まれました。17歳から葉たばこ作りに取り組み，福島県のたばこ（特に松川葉）耕作技術の向上，普及につとめ，田村郡を松川葉の日本一の産地にしました。福島県たばこ耕作組合連合会初代会長や全国たばこ耕作組合中央会副会長を務めるなど，日本のたばこ耕作の向上に貢献し，たばこの神様と呼ばれています。

また，大越娯楽場を建設し農民に健全な娯楽を提供し，若者の定着に努めました。

大越娯楽場

宗像利吉銅像

(3) 熊田　嘉善　～地域のために医学，教育でこうけんする～

1817～1887

熊田嘉善は，文化14年（1817年）都路村大字岩井沢字西戸の渡辺家の第６子として生まれました。三春藩医熊田家の養子となり家職を継ぎました。

漢学や医学を学んだのち江戸に出て西洋医学を学び，さらに長崎で蘭学を身につけて三春藩に戻り，藩医として地方では始めて種痘の法（天然痘の予防法）を実施しました。その後，兵学を学ぶかたわらに巨砲鋳造法の研究にあたり，水戸藩に招かれ溶鉄鋳砲の術を成功させています。また1868年戊辰戦争の際は，三春藩が戦火から免れる糸口を作ったといわれています。廃藩後は，明治５年（1872年）設立の養才義塾教授を勤め，明治６年（1873年）学制発布により三春小学校長，田村中学校教師に任ぜられるなど専ら教育に従事しました。

(4) 安瀬　敬蔵　～地いきをよくするために活動する～

1841～1908

田村郡堀田村（現，常葉町）の庄屋に生まれました。明治維新の後の明治６年（1873年）河野広中が常葉区会長のとき，副区長として活躍しました。明治10年（1877年）に喜多方市長となり，明治11年（1878年）河野広中の指導により喜多方に「愛国社」を設立しました。これにより，喜多方地方に民権運動が芽生え，自由党の根強い地盤になりました。福島県の自由民権運動の中心人物の一人と言えます。

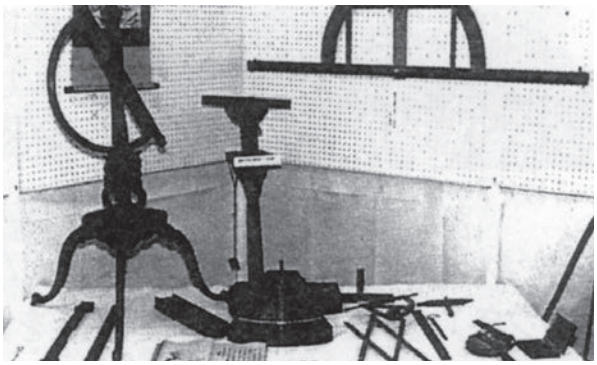
自由民権運動は，国会・憲法をつくり，政治的自由と民権を求めようとした全国的な政治運動であり，現在の社会・政治の基礎となりました。

(5) 佐久間　庸軒　～地いきのために学問を広める～

1819～1896

江戸時代後期から明治時代にかけて活躍した和算（日本独自の数学）学者で，幼い頃から父の影響を受けて算学を勉強し，「当用算法」という本を書いています。江戸時代末期には三春藩の藩校（学校）「明徳堂」で先生をしていました。明治時代に入り県の職員となって測量を行っていましたが，自分だけが国のために働くより，算学を教えて多くの人が国のためになるよう，生まれた石森（船引町）に戻り，塾を開き，農民を中心に2000人の弟子に教えました。

佐久間庸軒の書斎



当時の測量道具（田村市所蔵）